

<資料>【資料紹介】岩橋武夫の卒業論文「ミルトンのソネット研究」?

| | |
|-----|---|
| 著者 | 室田 保夫 |
| 雑誌名 | 関西学院史紀要 |
| 号 | 28 |
| ページ | 165-222 |
| 発行年 | 2022-03-15 |
| URL | http://hdl.handle.net/10236/00030220 |

【資料紹介】岩橋武夫の卒業論文「ミルトンのソネット研究」(一)

室田保夫

はじめに—岩橋武夫の卒業論文について

ここで紹介する岩橋武夫の「卒業論文」(写真参照)は、その表紙にあるように関西学院に入学した最後の年、つまり彼が英文科四年の時に執筆し、提出したものである。そのタイトルは「ミルトンのソネット研究」である。執筆の原稿用紙はマス目がない一枚二十四行の「私立関西学院文学部」と印刷されたものである。黒色のペンで書かれており、岩橋の妹の静子が筆記したものとと思われる。この卒業論文は関西学院大学院史編纂室に収蔵されていた。

周知のように岩橋は失明のため、早稲田を退学し、帰阪後大阪市立盲聾学校で学び、熊谷鉄太郎の勧めもあり関西学院文学部英文科に入学する。その級友に寿岳文章があり、二人はお互い良き友として学院生活を送ることになる。岩橋は日本ライトハウス産みの親、視覚障害者福祉の先駆者、

ヘレン・ケラーを日本に招聘した彼女の親しい友人、キリスト教社会事業家云々として知られている人物で、凡そ文学、とりわけミルトン(Milton)の研究者として一般には余り認知されていないという現況がある。

さて、この卒論の構成をみると、文頭に「TOMILTON」というW. Wordsworthのソネットが掲載され、続いてその訳詩、目次、序説と続く(四枚)。序説から結論まで一一五枚、英文ソネット(二〇枚)があり、合計一二九枚からなる大部のものである。今回、この卒業論文は紙幅の関係もあり、大凡、六割を掲載させて戴くが、全文が紹介できる続稿において若干の解説を付すとして、この資料につき簡単に紹介しておきたい。

岩橋の卒業論文がミルトン研究史にいかほどの価値があるかは、正直、専門外の私には論究する能力も資格もない。しかしこの卒業論文は彼の初の論文であり、筆者の関心事、

岩橋武夫研究において有意義なものと思われる。岩橋は生涯、三〇冊を超える書物を刊行する。彼がミルトン研究を志すのは関学入学前からのことである。この卒業論文にも、『パラダイス ロスト』（『失樂園』）や『復樂園』、『嘆きのサムソン』（『闘士サムソン』）等のことも触れられている。彼はミルトン研究をその後、エジンバラ大学留学帰国後の一九二八（昭和三）年から関西学院で教鞭をとり、五年後の三三年、基督教思想叢書刊行会から四五〇頁を越す大部の『失樂園の詩的形而上学』を上梓する。彼にとつてのミルトン研究の一応の区切りでもあった。年齢としては若干三十歳半ば、研究者としてはこれからという時期である。岩橋は関学で英文学の研究と教育の傍ら、視覚障害者福祉の活動、賀川豊彦らと共に神の国運動、講演活動とキリスト教伝道等様々な社会的活動も展開する。そうした彼の後の活動背景を念頭に入れておく必要がある。

彼は『失樂園の詩的形而上学』の序で盲啞学校での体験につき、ある教師から「ミルトンの失樂園は失明して出来たものです。だから君だつて、さう失望するには及ばない」と聞かされた時の印象は「永久に忘れることが出来ない」と回顧し、関学入学後につき以下のように述懐している。

それから暫くにして盲学校を退き、まだ専門学校であつ

た関西学院の神戸の旧校舎へ、妹に助けられて通学し始めた私は、指の先から覚束なげな触感を頼りに、よく失樂園を読み、『嘆きのサムソン』を繙いたものであつた。秋の更くる夜さなど、我を忘れて読み入つた私は、指頭にある文学の世界がミルトンのそれか、自らのそれなるかを弁別し能はず、時空を隔つるとはいへ、同じく人の世の悲哀と運命の苦杯に思はずも涙を注ぐのであつた。かうして勇敢にも自己の闇を『神の優しき軀』として耐へ、敬虔なる忍従の生涯を送つたミルトンの霊火が、弱い私を励まし強めて呉れたことは幾度であつたらう。

そして「学窓の卒業論文に『ミルトンのソネット研究』を志したことも思い出の一つである」と記している。エジンバラ大学留学の動機の一つも、「故ミルトン学の権威ディヴッド・マッソンが同大学に伝へた遺風を慕つての結果」であつたと回顧し、母校の教室でミルトンを講義するということは「奇しき摂理」である、云々と述べている。まさにミルトンへの思いは彼にとつて人生の羅針盤的存在であつた。

畏友寿岳は岩橋の召天に際し弔辞を書き、その中で「ミルトン研究などでも、ほかに比類のない仕事を残させたかった。『失樂園の詩的形而上学』がユニークな労作だけ

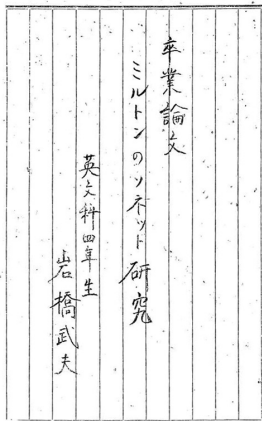
にまた晩年までミルトンへのノスタルジアを捨てなかつただけに、かわいそうな気がする」(『朝日新聞』一九五四年一月二十九日)と認めている。彼は一九四四年に閔学を辞すまで、教育に携わっていた。ライトハウスの仕事も軌道に乗せ、また多くの学生に英文学やミルトンを語り、とりわけ大村善永や本間一夫、瀬尾真澄、高尾正徳ら多くの視覚障害学生の教育にも携わり、後進を育てていった。加えてクエーカーを中心にしたキリスト教伝道、講演、執筆活動等々、忙しい日々であった。しかし一方で、ミルトン研究は封印していたようであるが、寿岳が述懐しているように、彼の心中にはミルトンが大きな位置を占めていたと思われる。かかる点からも、この卒業論文は、彼の人生にとって重要な意味があるように考えられる。

卒業論文を紹介するにおいて、原文をなるべく尊重することに努めた。以下「凡例」を掲げておく。

- 旧漢字は原則として新漢字に改めた。
- 文中の引用文はすべて二重カッコ『』^レと^レとなっているが、そのまま、起こしている。
- 句読点や文中のルビは原文のままに起こした。
- 送り仮名や当時の仮名づかい表現もあり、原文通りとしているが、明確な誤りの漢字などは訂正した。
- 曖昧且つ不明な用語については「ママ」と傍注した。

○外国人名の性と名の間、地名等は半角空けた。

○英文ソネットについては、岩橋の卒業論文のオリジナル性を尊重し、疑問のある英語を中心に、該当する箇所ルビ(ママ)を付し、後述するDMassonの著書を参考に、英詩の末尾に修正若くはその相違を※印でもって指摘した。従ってソネットのタイトル、行の形式、文字の大小、ピリオド、カンマ、コロ、セミコロ、アポストロフィ、ハイフン等については、原則として彼の卒論に訂正していない。但し※等の合字や欠落している英語等は参考程度に指摘した。参照にしたのはDavid Massonの著書 *The poetical works of John Milton*, London: Macmillan, 1917^レ である。



TO MILTON

Milton! thou should'st be living at this hour!^{p, 4}
England hath need of thee: she is a fen
Of stagnant waters: altar, sword, and pen,
Fireside, the heroic wealth of hell and bower,^{p, 4}
Have forfeited their ancient English dower
Of inward happiness. We are selfish men;^{p, 4}
Oh raise us up, return to us again,
And give us manners, virtue, freedom, power.
Thy soul was like a star, and dwelt apart;
Thou hadst a voice whose sound was like the sea;
Pure wa the naked heavens, majestic, free,^{p, 4}
So didst thou travel on life's common way
In cheerful godlikeness, and yet thy heart^{p, 4}
The lowliest duties on herself did lay.^{p, 4}

W. Wordsworth

※ W. Wordsworth 『ソネット』(1819)『The complete poetical works of William Wordsworth, With an introduction by John Morley; London Macmillan 1889 (p.181)』を参照した。

※1行目 hour: となつてゐる。

※4行目 hell → hall

※7行目 Oh は Oh! となつてゐる。

※11行目 wa → as

※13行目 godlikeness → godliness

※15行目 Wordworth → Wordsworth

ミルトンよ、お身は今の時にありてなほ生くべし、

英国はお身を要す、彼女はよどめる水の沼なり、

そが古きイギリスの、内在せる幸福の特質を失ひはてつる、

剣に筆、炬^{つるぎ}辺、はた館^{やかた}、四阿^{あやま}のすばらしき富を変ぜかし、

我等は利我の輩^{やから}なり、

お、我等を高くあげよ、再び我等に戻りきて

作法、徳操、自由、力をこそあたへかし、

お身が靈^{たま}は星のごとくにて彼方^{あなた}にぞ住む、

お身は海のごと響きよする声を持ち

はだかなる嚴^{おごそ}けく自由の

大空に似て清やけし、

そをゆえに人生の常道を喜ばしき神々しさにて

旅ゆくもお身が心は、

彼女の上ですぐれて謙遜なる義務をぞよこしたふ。

目次

| | |
|------|------|
| 序説 | 一頁 |
| 緒論 | 九頁 |
| 第一章 | 二十頁 |
| 第二章 | 二十八頁 |
| 第三章 | 三十三頁 |
| 第四章 | 三十八頁 |
| 第五章 | 四十二頁 |
| 第六章 | 四十六頁 |
| 第七章 | 五十二頁 |
| 第八章 | 五十九頁 |
| 第九章 | 六十三頁 |
| 第十章 | 六十七頁 |
| 第十一章 | 七十三頁 |
| 第十二章 | 七十八頁 |
| 第十三章 | 八十一頁 |
| 第十四章 | 八十五頁 |
| 第十五章 | 九十三頁 |
| 第十六章 | 九十七頁 |
| 第十七章 | 百二頁 |
| 結論 | 百六頁 |

序説

ミルトンの詩作中にあつてソネットが如何なる地位と關係を持つてゐるか、それが又英文学の見地から見て、何迄にまで研究さるべき性質のものであるかを論じやうとするのが、此の論文の目的である。序説として此処に本研究に必要な範圍に於て、詩人の伝記並びにその時代を略述するは強ち徒勞な事であるまい。

ミルトンは千六百八年十二月九日、ロンドンブレッドストリート(即ち現今のアーティレリーウオーク、バンヒルフィールドに於て死んだ。その六十六年間のライフをどの批評家も三つの時代に区別し取り扱つて居る。第一期は千六百八年より千六百三十八年に至る期間にして、準備時代或ひは此の時代の末期即ち千六百三十二年から千六百三十八年に懸けた七年間のホートン生活を以て代表されて居る場合もある。第二期は千六百三十九年から千六百六十年の期間にして、此れをパンフレット及び論争の時代、或ひは政治的实际活動の時代とも名付け得られる。第三期は千六百六十一年から千六百七十四年に互る期間にして、エピックの完成された詩的時代である。)

第一期

ミルトンの父は矢張りジョン・ミルトンと云ひピュリタンでその職はスクライブナーであり音楽を長じ、當時に於て重じられた作曲数編を残した。その祖父及び祖先は代々オックスフォード州の郷土であつた。ミルトンは當時有名な教育家として知られたアレキサンダー・ギルの校長たるセントポールズスクールに学び、家庭教師としては以前牧師補であり、後のブレスピテリアニズムに至る詩人の内生活に影響を及ぼせる、スコットランド人トマス・ヤングが採用されて居た。十五にしてダビデの詩編の英訳を試み、フェーヤーファクスのタツソー(千六百年)及び、パーシルベスターのドウバルタス(千六百五年)とを読んだ。此の間、ギルの息子なるヤングと深交あり、共に手を携へてケンブリッジのツリニティーカレッジに学びて後、大学に入り千六百三十二年その過程を終了した。在学中ミルトンがレディー・オブクライストと渾名あだなされた事は広知の事実にして、二十才の時すでにギルに対しケン

ブリッチの学風狹隘にし宗教的傾向また捕はれ学生の学間に忠実ならざる事の慷慨を漏らせる程であった。卒業後は職業又は実社会的煩鎖から逃れんとする傾向多く千六百三十二年ケンブリッチの或る友に斯くの如く書いた。『夜の時が過ぎて行く事を戒むる善き番人、そんな風に私は己が生涯を呼び求めたい。仮令まだ矇朧として人類に対し何等奉仕をなさないと云ひながら。そうして又基督が総ての者に働く事を命ずる日がほど近い事を。私は己自身に何処となく疑ひ深い。そうして行き暮れた或る寂しさをも自己の裡に明亮に見付ける。』

ホートンは当時のロンドンを去る十七哩の地に位し、ウキンザの塔を眺め得る牧場に富んだ水や林の麗はしい場所である。ミルトンの七年間の閑雅な生活は此処で送られたので、詩人自身の口を借れば『多くの研究と共に瞑想的な年々』とある。それは又宗教や社会的智識の探求にも費された。千六百三十七年には次の如き文意が親友ダイオーデティーへの手紙の一部に窺はれる。『貴下は小生が何であるかと云ふ事に關して、又は小生が何を考へつ、あるかに付いて、多くの質問を發せられるだらう。不死の神の助を持つて居るのに何故と。あ、その言葉を許して下さい。小生は唯それを貴下の耳に囁く。そうです。小生は飛翔の為に己が翼を養ひつ、あるんです。』斯かる環境に於て、ラレグロー、イルペンセロソー、アーカデス、コマス、リシダス等の詩作が産れ出でた。千六百三十七年の四月にはその母を失ひ、記録によると当時流行の疫病と共に非常に侘しい人生が詩人の周囲にあつた事を知り得る。ミルトンは善く母親の墓畔に行つて逍遙し冥想したとある。その翌年の春、十五ヶ月間の外遊を試み、パリにあつてはグロチアムに邂逅し、フロレンスの学界をも訪れ、ローマに至つてはバーベリー宮殿に於て当時隠れなき名声を歌はれて居たレオノラ バロニーの音楽を聞き、その音楽の敏感な魂をいたく動かし、ラテン語のエピグラム三篇を捧げなどし、又マンソーをも訪れた。時に英国にあつては革命の内乱勃發し、それを聞くや『私は外国の地にあつて己自身の平安を楽しむ事を恥づべきだと思つた。故国の人心が自由に対して奮戦しつ、あるのに』と叫び、フロレンスを経て急遽版國の途に上つた。それは丁度千六百三十九年の暖い南の春が来た頃であつた。はしくもミルトンは長年誰とも逢ふ事を得ず監禁されて居たガリレオが、ギオイエラのピラーに許され連れ行かれるの好機に再会し面会する事が出来た。ローマの強權に対し、捕はれた過去の智識に対し、徹底的な反抗を

試みた星学者も、今は歳老ひて剩へ盲目の苦悩を呻吟して居たが、さればと云つて内に燃ゆる靈火は壯年を偲ばせて居た。此の奇遇が若いミルトンを捕へて仕舞つた。そうして其処から後年己が盲目の運命に対し、誤れる教会主義に対し、エクレチアステイカルな感激と反抗の力を握り得やうとは不思議な運命の業である。

第二期

千六百三十九年八月イタリヤから返国すると、フリートストリートの郊外に当るセントブライデスのチャーチヤードにある裁縫師ラッセルの家に寄寓し、次にアルダースゲートにある小やかな己がガーデンハウスに移り住み二人の甥を教育した。此処に当時の英国の国情を略記しやう。

抑々民権はエリザベス時代頗る蹂躪されてあつたが、女王の政治の善ろしきを得た為、人民は信賴して此れに反抗しなかつた。女王の次にジェームス一世、スコットランドより迎へられて王位を即き、スチュアルト朝を開くと王権神授説を抱き憲法を守らず暴政を恣にしたので度々議會と衝突した。子、カロロ一世また同説を固執し、十一年間議會を召集せず、濫りに人民を禁錮したり租税を増課したり權利請願を無視したりして暴行多きゆゑ、人民はその専制を厭ひ、故国を去つてアメリカに移住する者も多くなつた。千六百四十年、王スコットランド出征費に窮して、やむなく議會を召集したが、議會は王を攻撃してその要求に応じなかつたから、王は兵力で有力議員を逮捕しやうとし失敗した。千六百四十二年王は北方にて兵を挙げ遂に八年の内乱を起さした。此の時、議會党に名将オリバークロムエルが出て、千六百四十五年王党をネースビーに破つた。当時議會党はプレスビテリアン、インディペンデントの二派に分れ、前者は立憲王政を、後者は共和政を主張して居たが、クロムエルは兵力でプレスビテリアン黨を議會より追ひ、次いで国民の公敵として王を死刑に処し王政の廃止を宣言したのであつた。マークパチソンがその研究に於て述べて居る如く、『ミルトンは団体の流行、宗教の憎悪と云つた誤れる熱狂の雰意氣を呼吸しながら、己がプロースパンフレットの先頭的短歌の中に赫熱と燃ゆる光輝の焰を緩和しつゝあつた。』のである。此の期間は詩人ライフとしてはエピソードと見るべきであるが、ミルトンは己が詩的才能を教会制度の攻撃や、

政治、宗教に対する論争で犠牲にされつゝ、ある事を決して忘れては居なかつた。然しながら此の期間が二十年に余り続くとは予想さえつかなかつた。エビツクの熱情と共に、内にあつた批評的才能も同程度の熱情を以て詩人を動かして居たのである。チャーチピュリタンからプレスビテリアンに、それからロイヤリストとして、或いはインディペンデントとして、クロムエル派として、或ひはオリベリアンとして目まぐるしく論争の渦中に突入して行つた。斯く態度を異にした所以は、ミルトンが飽迄自由の愛好者であり、新しい制度のもとに於ける新しいエルサレムを夢想するユートピアを心に抱いてゐたからで、換言すれば政治的諸説の中へ、ベーコンの理智の世界に於て説きしものを実現するにあつた。飽迄も本質的も変らない真理、即ち自由を愛しアイコノクラストとして真の人間であり、真の耶穌信者であらうとする努力にはかならなかつた。そのパンフレットの総数は二十五種で、その種目は明亮に露骨に現はされて居る。内二十一は英語で四はラテン語で書かれた。内容から見れば、その過半以上は教会若しくはエクレジヤステイックなものである。

此の間、家庭生活にあつても色々な変化を見た。千六百四十三年の夏には一月の小旅行を田舎に試み、その理由は定かではないが、兎にかくメリー・ポーエルを連れ戻り第一の妻とした。然るに夫婦間は面白くなく妻は郷里に逃げ販つたが、年を経てその嘆願を許し再度共同生活を営み、剩へその家族迄引き受けアルダースゲートの家にては手狭てびだを感じるに至り、バビカンに移り住み、のち千六百四十七年のミカエルマスにはハイホールボーンに移住した。然して千六百四十九年一月三十日、王が倒されるや同年三月十三日にクロムエルの執政する外務省よりラテン語のセクレタリーとして招聘され、遂に就任し再び居をペティーフランスにあるガーデンハウスへ移すに至つた。以後九年間の生活（千六百五十一年から千六百六十年）を其処にて送つた。千六百五十二年の夏、妻メリーは第二四児を産まんとして死に、ミルトンは千六百五十六年第二の妻を娶る迄、残された三人の女児を育て、来た。第二の妻はカセリン・ウッドコックと云ひ、此れも僅か十五ヶ月の生活を共にした丈で産褥に死し、再び孤独の生活に己を見出した。此れに先立つ千六百四十九年頃より誤りないシンプトムが詩人の眼を脅威しはじめ、五十年には早、左眼が全く失明し医師の警告があつたのに拘はらず、読書と論争の執筆に右眼の視力をも消尽し、終に四十三才、

即ち千六百五十二年の初めに全く暗黒の中に閉されたのである。

第三期

この期間には偉大なる詩、かのパラダイスロスト、パラダイスリゲインド、及びサムソンアゴニステスの三部作が、最後の孤独な失意の中より失明と友なき苦しみを通して、生れ出でたのである。歴史的に觀察せば、千六百五十八年五月三日にクロムエル死し、引いてその武断的共和政府も倒れ、後二年王政復古し故王の子カロロ二世迎立されたが、素行放逸にして憲法を重んぜず、民権を押し旧教を復活させやうとした。故に議會は審査律及び人身保護律を議決して反抗した。王の死後、弟ジェームス二世が立った。此の王政復古の乱を友人等がスマイスフィールドに、千六百六十年の五月より八月までかくま匿った。以後許されてジェーウキンストリートの家に余生を送り、此処にて諸種の大作を完成したのである。此れに先だつ千六百六十三年には第三の妻としてエリザベスミンシャルが迎へられて居る。

然らばソネットほどの期間に属すべきものであるかと云ふに、主として第二期を中心とした第一期末を含む二十八年間に創作されたもので、センツベリーがケンブリッチ英文学史の中にあつて述べて居るが如く、詩人として見たるミルトンの暗黒時代を点綴する美しい星の輝きにも譬へ得るもので、散文的な論争の真中ただなかにあつて折節に詠まれた此等のソネットは、詩人の実生活を窺ふ葉としても興味深く、又第一期に於けるミルトンの詩的素質が如何やうにして第三期の偉大なる完成を見るに至つたかを知らうとする場合にも、是非とも研究しなければならぬものである。

参考書目録

チエンバーの『英文学史』

ケンブリッジの『英文学史』

テエーンの『英文学史』

『マンオブレタース』の中マークパチソンの『ミルトン研究』

ジョンベイレーの『ミルトン論』

マコーレーの『ミルトン論』

センツベリーの『リテラリーテイスト第二巻』

センツベリーの『プロソディー』

マークパチソンの『イングリッシュソネット』

ペリティーの『ソネット註解』

ブルックの『ミルトン』

ローレーの『ミルトン研究』

ワードの『ザ、イングリッシュ ポエツ』の『ミルトン論（パチソン）』

マッソン編『ミルトンの詩集』（イントロダクション付きにて旧版を選ばず千九百十七年版を選ぶ）

バクテルの『ギリシャ神話辞書』

緒論

ベイレーの言葉を借れば『ミルトンのソネットに対しワーズワースはその不朽なる詩句の中に於て満足すべき称賛を与へて居ると共に、立派なる批評家がそれに付き考へ且つ学べる総ての讃辞は、マークパチソンの学者的な著述の中に抱含されておる。』の如く、或ひはセンツベリーが『デビッドマッソンに次ぐミルトンの完全なる研究者』の言の如く、以て如何にミルトンの批評家としてパチソンが重要であるかを窺ひ知る事が出来る。此処に先づそのパチソンの至りつくせる研究中にある取り扱はれたるソネットの性質を歴史的に小述し、次いでソネットの形式、本質を論じ以て緒論としたい。

歴史的

英文学に於て最初ソネットが現れたのは、普通トッテルスミセレニーとして知られて居る書卷中であつた。概書は千五百五十七年にそのタイトルとし "Songs and sonnettes written by the ryght Honorable lorde Henry Howard late Early of Surrey and other" を有しロンドンから出版された。その中には六十種ほどの短詩がソネットス、(sonettes) と云ふ名称のもとに集められてあるが、其等は十六行から或ひは十一行から成り立ち、又韻脚も無統一にして、一行の長さも多様で整つて居なかつた。然して此等はペトラークの典型を模倣しやうとする最初の努力であつた。早くよりラテン及びイタリヤの詩文の学徒としてのサーレーは、韻律的に排列され調よく計画されたイタリヤのサウンドのチャームに対し、全く敏感にならざるを得なかつた。然しながら詩文の問題は単に言葉のメロディアスな排列に止まらずして、サーレーが発見せる如き構文法的な順序の結合を伴ふリズムの排列である。サーレーは此の意味に於て、サウンドとセンスとを結合せんと試みた最初の人である。実に英文作詞の生命は此のサウンドとセンスのバランスハーモニーの上に懸かつて居た。仏文詩にあつては此の変化が完全に一時代に達成されたが、英国にあつては同様の過程が徐々に成熟しゆく言葉の關係上、一世紀を要し、然も尚緩慢な進化しかさなかつた。サーレーによつて計画された此の進歩は或る批評家の一団をして、彼が新作韻法の発明者であるが如く記述せしめたほどである。此のシステムをソット博士はリズムカルに反対なるメトリカルなものと名付けてゐる。即ち前者はチョーサーやサーレー以前の他の詩人達のメソッドであつたものである。此の計画は単なるペトラークのソネットの模倣に非ずして、その形式が真実な又高尚な情緒の輪動物とし、適當なものであると云ふ觀念から出發して居る。斯くして此の新なる一形式は大小の各詩人に採用され、以後五十年即ち千五百五十七年、かのトットルスミセレニーの頃には各種の変化がその上加へられるに至つた。此処に注意すべきはソネットの歴史を研究するに當り、単に形式上より論じて十四行詩に限定する事は誤りである。譬へばワットソンのヘカトムベシヤは各節十八行より成り立つてゐるが、かのセークスピヤーのその行数に於て正しきとは云へ、他の諸点に於て

難点の多いソネットと同様、試験的なものと見て差し支へないのである。

完全なるソネットの制作は困難事にして、サーレーですら美しい趣味とその鍛錬された耳を持つて居るに拘はらず、多くの制作中であつて二三回しか成功を見せて居ない。然もその中の最良なるものは、単なるペトラークの訳詩にすぎなかつた。斯くしてソネットは、シドニー、ダニエル、リチャード、リンチ、コンステープル、セークスピヤール等を経て發達して来たのであるが、此等の詩人もサーレーと同じく成功をみせる事は稀であつた。セークスピヤールソネットとして知られて居るかの優秀なる詩の連続も本質的に觀察する場合には、セークスピヤールなるが故にその真価以上の価値を与へられて居る厭ひがある。今、行数より見るにそれは正しいものであるが、他に避難すべき点も多い。その一つは、各ソネットが個々別々に存在せずして前後の關係を辿り、始めて印象を完全にし得る訳で、即ち個性を失ひ恰も詩の一スタンザである如くなつて居る事である。その二は言葉の打ちのめし難い金屬に対するミーニングとメロデーとの争闘にあつて、しばしば降伏した詩人を指し示して居る事である。百五十四に余るソネットの中にあつて、セークスピヤール己が武器のマスターとして成功を修め得たのは極く小数にすぎない。その成功せるものにあつて、明亮に個性が発揮され無双の勝利を飾つて居るのである。然しながら元來セークスピヤールがソネットの形式を採用した事は不幸であつた。此の形式中に於てその放逸せる力は窒息するの余儀無きに至つた。セークスピヤールにはもつと自由が要せられた。そうして自由である時にのみ、他の如何なる英詩人も及ばない雄弁を語り得たのである。斯くの如くにして、ソネットの狭い限界にあつては、短縮され簡結マツに抽象する事が要求されてゐる。故に水の如く自由なる思索者に反し、豊ゆたかなる空想或ひは強大なる理智を持つる者に取つては、限界の束縛が反対の結果となるのである。斯かる者にあつては、力は統一され大なる束縛に服従しながらもその中であつて己が個性を完全に表現し得るのである。斯くしてセークスピヤールは全く古典的統一に無智であつたが、又ソネットの確立された法則に対しても同様であつた。或ひは些細な法則に囚はれなかつたと云ふ弁解が此処に生じ得るかも知れんが、詳細に研究せば、当時流行せる新工夫に富めるとは云へ正統ならざるダニエルのメトリカルアレンドメントを採用し、更に善き形式が存在せるや否やに對し些いささか少も疑惑を起さなかつた事が明瞭である。故にセーク

スピヤールのソネットはダニエルの如く七つの韻脚を有しオクタブとセステットに分解しあたはずして、各四行三節カブレットに結句されて居る。セークスピアースソネット(千六百九年)とミルトンの最初の試み(千六百三十一年)との間に最も注意すべきソネットが作られて、それはウキリアムドラモンズポエムス(千六百十六年)の中に抱含されて居る。然してその影響が仮令直接字句や表現の模倣なくとも、ミルトンに影響せし事は疑ふ余地がない。故にドラモンドとセークスピアールとの比較してみるに、その間ソネットが如何なるものを要求しつゝあるかを明亮に知る事が出来る。即ち単純性及び表現されんとする感情の直接輸導及び曖昧なる言葉によって漏らされた錯綜せる思想の回避等、此等はドラモンドが避けやうと努力したもので、約言すればドラモンドはセークスピアール式のソネットを否定したペトラークの模倣者であつた。然しミルトンは模倣者の模倣ではなかつた。ミルトンのソネット史に於ける顕著なる所以は、セークスピアールの偉大なる名をもとめせず、エリザベス朝時代の欠点からその形式を開放した事である。即ち内容中に誤り用ひられた奇智の欠点、他は形式中に誤り採用された韻脚の欠点である。ミルトンはソネットを感情の詩とし、工夫の詩としては肯定しなかつた。然してメトリカルな構造は、決してセークスピアール式の各四行三節カブレットで終つて居る形式では達し得られないと觀察し、己が詩的才能をダンテ、ペトラーク等のイタリヤ学派に専ら注いだのであつた。さらばと云つてイタリヤ派の規則を窮々と厳守した訳でもなく、眞の努力は英国式なソネットの形式を確立せんとするにあつた。故にミルトンの作品中にあつては、純イタリヤ式のと韻脚或ひは休止に於て動動くその規則を無視せるものがあり、此れが自意識的にか又は形式統御不完全なるによりなされたかは疑問であるにしても、こはミルトンが古き規則の束縛されつゝ尚其処に自由なる己が思想を挾さしはさまんとする努力にほかならなかつた事が近時明亮となつたのである。然も此の方面に於ける価値以上にミルトンの功績はその詩材にあつた。此処に始めてソネットがオッド若しくはエレジーより異なるものとし、一つの独立せる情緒のみの表現となつた。試みにミルトンのソネットを見るに、全体の思想若しくは感情を捕へんが為に相連続せる二三のものを読む必要は更に無いのである。各ソネットは完全なる一小詩にして、思想を理解するに十分なる説明と画像とを有し、決して長詩の断片即ち一スタンザにすぎないが如き有名無実なものではない。ペトラール

クのビタイモルテに於いては各ソネットが他の助けなく独立し得るとは云へ、尚総てのものが同一なる感情を伝へ相互に一楽調のバリエイションであるが如き關係を示す厭ひあるに反し、ミルトンのそれは各自独立を示すは勿論、全体として一種題をのみ目的とはせず、その詩的情緒は種々異り二十八年間の実生活を通した偶感、歡喜、激怒、悲哀、懊惱の率直な表現である。故に各々は明亮な人格個性の發露をなし、此れがミルトンのソネットをして偉大たらしめる所以である。各人物事物或ひは事實は、生涯の或る期間に詩人を刺激し、或る時は魂の奥底で、或る時は感情の表面に於て、常に眞実に力強く動いて居たもののみである。其処にはエリザベス朝時代のソネットが持つて居た幽雅な技巧や飾り気は全く姿を隠して、男らしい果敢的な單純さが満ちて居る。ミルトンは最初の出発に於て時代の風潮なる虚榮的な趣味に危くも落ち入らんとし、青年期の作ソネット第一を残せるほかは、單一に正道を踏み、決して再びその誤りを繰り返さなかつた。

規則の由来

ソネットの規則は使用や慣習にのみより作られて權威を持つに至つたか、若しくは形式そのものの中に規則を含み得る理由と可能性を持つて居たかの問題が先づ最初に起つて来る。此の説明を簡単にすれば両者とも規則をあらしめた理由である。恰も詩歌が散文と異つて自然に言葉の選択がメトリカルな法則に従ふ如く、或ひは誰が英國のミーターを作つたかと云ふ間に答へられぬ如く、誰がソネットの行数や韻脚を制定したかは答へ得られないのである。然しながら現今韻脚なきものや、十一行のソネットを書く詩人があらうか。昔スペインサーがブランクバースで作り、或ひはアントニオダテンボーが(千三百三十二年)如何にそれに就いて論じやうと、ソネットの進化は当然辿るべき道を辿つて来たので、最も根本的な十四行及び韻脚の必要はその性質とし形式として肯定されるに至つたのである。法律が權威あるのは唯そのもとにあつて生きる人の共同一致にもとづく場合に限られて居る如く、ゲームの規則が遊戯者の約束によつて有効である如く、ソネットの規則も其処に一の根柢を有して居るのである。即ち此の意味に於ては慣習的なものであるが、と云つて全然そうではなく一方に於て、物の性質そのものから

の発生、即ち時のアイリアから理由あつて確立されたものである。

名称

ソネットはイタリヤの *sonetto* からきたもので古きイタリヤの *sonare* 即ち器楽に合せ弾ずるの意味があつた。当時イタリヤではバラタ、ソネットー、キャンゾーンの三形式は明亮に区別されてあり、キャンゾーンは唯歌詞とし、ソネットーは器楽の伴奏を伴ふものとし、バラタは舞踊を伴ふものとしてであつた。然し此の三者はダンテの時代に至り現在の英文学に於けると同様、唯三つの異なる詩の形式を現すにすぎなくなつた。然して此等の三者中バラッド及びソングは曖昧に定義されて、唯ソネットのみが最も嚴格に理解され、他のいづれの詩形よりも英文学にあつては繊細に容認されるに至つた。

形式

大別してソネットはイレギラーとレギラーの二となす事が出来る。前者はセークスビヤー等によつて採用された各四行三節カプレットで結句されたもの、後者はミルトンの形式である。前者のライムはその数種々なれども、特に顕著なるはスペンサーに現れた五の即ちA―第一、三、行、B―第二、四、五、七、行、C―第六、八、九、十一、行、D―第十、十二、行、E―第十三、十四、行の韻脚及び、更に滑かな響を持つは七韻脚、即ちA―第一、三、行、B―第二、四、行、C―第五、七、行、D―第六、八、行、E―第九、第十一、行、F―第十、十二、行、G―第十三、十四、行、にして此れはフリーフォームの名さへあり。セークスビヤーの有名なものは皆此の形式によつたもので、その長さは十四行の限られビート若しくはメトリカルアクセントは五に限られ、各行は相韻しなればならず。後者レギラーなものはその韻の性質より全体が二つの組織に分たれる。最初の八行及び残りの六行が此れである。前者をオクターブと云ひ、後者をセステットと云ふ。然して前者は更に二つのクォートレインに、後者は二つのターセットに分たれる。オクターブは二つの韻脚を有し第一、四、五、八は第二、三、六、七、と相韻しなけ

ればならない。故にクォートレインの排列は斯く現す事が出来る。AB' BA' AB' BA' セステットは又二及び三のライムを有さねばならない。それを現せば EG か CD CD か CDE' CDE' である。ターセットのライムは同じ子音の結合から成り立つてはならない。又クォートレインに於けると同様、同じ母音の相韻から成り立つてもならない。譬へばセークスピアのソネット五十五の如きで Emility と Postarity がターセットに於てクォートレインの Masonry と Memory に従ふて居るが、此れは大なる誤りである。又ソネットは韻脚の性質上ターセットに於てクォートレインに於ける相韻の反復を避けねばならない。譬へばセステットの CDC' CDC' の相韻は許すことが出来ない。と云ふのは DC' CD はすでに二度クォートレインに於て反復された形であるから。又ダブルライムはイタリヤにあつて必要なる規則であるが、英国にあつては国語の性質上それが禁じられて居る。更に最後の二行は互ひに相韻してはならない。即ちソネットの構造として思想及びミーターの連続性が必要である故に、最後のカプレットが互ひに相韻する場合にはそれが独立となり、情緒の波を急激に抑圧するからである。

詩財

ソネットも他の芸術作品と同様、その統一を有さねばならない。即ち一つの思想若しくは感情を表現しなければならない事、此れである。然して此の思想情緒はソネットの最初の部分、厳密に云へば最初のクォートレインに始められ、第二のクォートレインにあつて完全のそのなになるかを理解されるに至るまで發展せねばならない。然して後、小林止が行はれ次のセステットの發展する準備とせられる。次に最初のターセットが始まるや思想及び情緒は再び起こり、然もそれが結論へと運び行かれ、第二のターセット即ち結論にあつては今迄のものを総て静かなる感情若しくは思想の結末として結ばねばならない。然しながら完成の意味を現はさねばならぬ必要はあれど、エピグラマティックな点があつてはならない。此の点に於てソネットが明亮にエピグラムと區別されるのであるから重要である。エピグラムにあつては此の結句が総てであり、それに先立つものは三段論法に於ける前提の關係にかすぎないが、ソネットにあつては全く趣を異にし、エンファシスは殆ど一様に置かれ、徐々に総てが發展し急激

な結末などは避けられて居るのである。又、斯かる狭き十四行の限界にあつては、必然的に言葉の制限が加へらる。即ち分詞、助動詞、又は普通一般の形容詞は特種な効果を生ずる場合のほか重複されてはならない。又曖昧な繊細に流れた行は最も慎まねばならない。と云ふのは聴者の心理が一度斯かる困乱に落ちた場合には、それを恢復するに十分な余地がないからである。故にかの英国にあつて、千五百七十五年作詞法に対し二つの規則を与へやうとしたジョージ・ギヤスコインが警告する最初のものは実に此の曖昧にあつた。此の根拠に基いてソネットに要求されるべきは、明快なる画像及び熱烈な感情及び抽象的でない率直な具体的な言語である。斯く述べ来たつたソネットの法則はその理想的なるものであるとは云へ、実際作詞於ては往々その一部を無視せられざる場合も少くない。兎にかく以上の略述によつてミルトンのソネットを研究するに必要な予備智識は大半終了した事と思ふ。故に以下章を追ふて本論に這入り、時代及び内容に従つて二十四のソネットを論評したい。

第一章 ソネット一 (夜鶯によせて)

SONNET 1.

O nightingale! that on yon bloomy spray

Warblest at eve, when all the woods are still;

Thou with fresh hope the lover's heart dost fill,

While the jolly hours lead on propitious May.

Thy piquid notes that close the eye of day,

First heard before the shallow cuckoo's bill,

Portend success in love. O! if Jobe's will

Have linked that amorous power to thy soft lay,

Now timely sing, ere the rude bird of hate

Foretell my hopeless doom in some grove night.

As thou from year to year hast sung too late

For my relief, yet hadst no reason why.

Weather the Muse or Love call thee his mate,

Both ^{thim} I serve, and of their train am I.

※1行目 nightingaleの「がなご

※5行目 piquid → liquid

※7行目 Oの「がなご

※14行目 thim → them

お、夜鶯、向ふの紫に匂ふ茂みに

森中が沈まりかへった時夕べを歌ふ、

お身は爽かな望みをもて恋人の胸を一杯にする

あの心地よい時が吉祥の五月を引き連れて来るまに

がさがさした杜鵑ぼしとぎすの歌の前の最初にきく

太陽の目をとゞすお身が流麗の調べは恋の成功を予言している。

あ、若しジュピターの神心があの愛の力をお身の優しい歌に寄せるならば

お身すらそのゆゑを知らず年々としとし私の慰めにとり

おそすぎて歌ひがちとは云へ、

しかし今は丁度よい時だ、運命の荒々しい鳥が
私の望みなきさだめを其処いらの茂みで

告げ知らせる前にうたってくれ、

さすればミュージズと愛の神のいづれがお身をその夫婦つづまに定めるだらう

その二人にこそ私は仕へまたその従者でもある。

此の詩題『夜鶯に寄せて』はミルトン自身の監修になる千六百四十五年及び七十三年の原版には現れてゐない。パチソンによると此の詩と『セークスピヤー墓碑銘』とは、ミルトンが未だ従来の慣習及びモデルとしたイタリヤ風の奇想使用の策略から全然脱却し得ないもので、後リアリティーの意識が確実に目覚めて以来、決して再び斯かる空疎な度に過ぎた新工夫を齎もたらせやうとする如き誤りには落ち入らなかつたとある。此の作は年代不明でマツソンもケンブリッジ時代かホートン時代のいづれかであるとは書いて居るが、確なところは解らない。パチソンは多分前者即ち二十二才の折(千六百三十年)だらうと論じて居る。兎にかく作意は春が遣つて来て友なき青年の胸には青春の血潮と共に色々な思ひが湧き上り、見知の恋情が高まりその胸を抱きながら夜鶯の歌を聞き、空想を走らせて居る事を歌つたものである。然もそのうちには杜鵑が鳴く前に鶯の歌を聞いた者は、一年と立たぬ間に恋人に愛情を訴へられると云ふ迷信的な伝説が巧妙たくみに織り込まれてある。元来英国にあつては夜鶯は四月の中頃以前に先づ雄鳥が渡つて来て歌ひ出し、それに十日とは遅れず雌鳥の従つて来るのが習慣である。

鶯は夏の戸口に歌ひ出で

結実みのりの日の茂みにその笛を止む、

とセークスピヤーもソネット百二に歌つて居る。此の時分杜鵑も相前後して歌ひ出すのであるから、其処に興味あ

る占ひ染みた迷信が作られたものに違ひない。古詩にあつて杜鵑はセルフィッシュのシンボルとして書かれてあり、可憐な夜鶯と対象されて尚興味を誘つたものであるが、時代を経るに従つて此の鳥に関する詩人達の考へ方が變化して行つた模様である。

此の詩は用語に於ても問題多く、先づ最初に感投詞〇を用ひ書き出してあるのが批評家の論議を醸すらしい。日本人として然も浅学な私は此の辺のデリケートな心持は解らないにしても、文法家が名付ける呼びかけの印にしか役立ってゐないやうな気がする。パチソンも理由はないが何人にも一種の傲慢の感を与へると書いて居る。然しウワズワースも此れを真似た。

お、夜鶯、まことやお身は

焰なす心臓を持つ生物、

一行目に Bloomy spray とあるが此の形容詞の Bloomy も名詞の spray も共に又問題である。Bloomy はアングロサクソンの Bloosn ラテンの Flos の意が短縮されたもので、今『光を以て覆はれて居る』と云ふ本来の意味で読まうとすれば、英国の四月の気候には相応しからぬ趣がある。花の開くのはもつと後の季節であるから此の場合 Bloomy は比喩的な意味に解釈しなければならぬ。即ち蕾が出る前に液汁が紫の光沢を樹皮に与へ、恰も粉が吹いた感をなすので、マシューアーノルドも "Inyris" の二百一十一頁に此う歌つて居る。

小葉はまるで春のやうに柔かいとは云へ

柴林や茨の上に優しい紫の色を吹きかける。

次に Spray だが此れは夜鶯の羽を休むべき所ではない。チョーサーの "Sir thomas" スタンザの十に

山鳩は小枝の上に

高々とほがらかに歌ふ、

とあるが、ミルトンの夜鶯を同じ小枝の上に想像するのは奇異な感がある。元来 *Spray* は *Spring* の *アングロサクソンの *Spreca* に独逸の *Spreiten, Spreizen* に相当するが故に、小枝を意味する。ところが十八世紀の詩的用語中であつて、此の語は茂み全体、或ひはその一部の代用として用ひられるに至つた。マッソンの *Isis* の四十七にそれが現れて居る。*

あ、私は向ふの櫛の茂みを善く覚えて居る、

そこでアディソンがその琢磨した歌を最初に歌つた。

だから私は『Bloomy spray』を『紫匂ふ茂み』と訳してみたのである。さて此の詩に現れた夜鶯が一見して詩的なものであるとは云へ、実際のなものでないと云ふ悪く云へば書物的な難点が感じられるが、此の際少しくミルトンの自然観に就き小述してみたい。マッソンがラレグロー、イルペンセロソーの序論に同じ題目を次の如く論じて居る。『然し此等の詩が或一つ更に云へはその詩が書かれた場所の風景の描写を包含して居ると想像するのは詩の誤れる観念、或ひは過酷な観念とも云ふを得べきである。その場所（即ち我々はホートンであると考へる）はその影響を詩中に持つてゐる事は確であらうが、然しながら詩人の目的は決して實際上の風物の記述ではなくして二つの情緒を表明し、然も各々の情緒をしてあるが如く動かす事に依り、境遇とそれに類似せる或ひはその營養物とも見なさるべき付属物の中にあつて果^{はた}さんとしたのである。故に風物はビジョナリーなもので、各種類の場所よりの折衷的の回想が一つの理想的なる風物に混融されたものである。』又パチソンは次の如く書いて居る。『ミルトンの自然観はかの科学的自然主義者の如きものではなく、まして細密なる観察者の態度でもない。それは飽^み迄も事物

の分析の為にその全体的印象を非常に力強く感ずる詩人の態度である。』故にミルトンの描写は時代がクラシカルであった事も念頭に於て考へる必要があるとは云へ、仔細に検査すれば朦朧とはして居るが多くリアリティーを含んで居る。然しながらそのリアリティーは対象物それ自身に対する鋭い内省の要素に乏しきながら、真実なる観察者の魂に於ける情緒のリアリティーである。斯かる故に表現されてある自然は、動形を異にされ色彩を変化されありと云へども決してそれ自身の本質を失ひをらず、返つてその特色を鮮明にされたと見るべきが至当である。此の点に関してはティンも論じてゐる。今実例をあげて説明するに足る充分の余白を有しないが、若し斯かる見地からしてパラダイスリゲインズの四百四十一行及び、アーカデスの八十九行及び、パラダイスロストの第一巻六百十三行及び、ラレグローの雲雀の描写を見る時には、容易に肯定され得る訳である。

再び此の詩の用語に戻つて第四行目の The jolly hours lead On ……の句を見るに jolly は hours のエピセツトとしては普通でないと批評家は論じて居る。然しスペンサーのフェアリークイーンの Canto of mutabilite の七に月々を次のやうに歌つてゐるところがある。

爽かな 弥生、麗はしの五月、

水無月は心地よし。

此の場合 jolly は "That which pleases, is agreeable to the eye or otherwise." の意味である。兎に角ミルトン jolly hours を春の先駆として書いて居るので、パラダイスロストの四巻二百六十四行に永遠の春を次の如く歌つてゐるが、その辺と相符合するところがある。

そのまに宇宙の牧神は

美の女神、時の神と踊のうちに手を取り交はし
永遠の春を導き連れてくる。
とどとは

要するに此のソネットはチョーサーの詩『杜鵑と夜鶯』の中の数行を発展させたものと見る事が出来る。

されどわれ過ぎし夜、目覚めてよこたはれる時、

いかに愛人はしるしをもち

そは彼等の間にて荒くれし杜鵑の

歌に優り夜鶯を聞くはよからんてふなべての物語なりしを思へり。

—— (杜鵑と夜鶯より)

後年アルフレッド オースティンも同様の題目に就いて歌って居るが、此の場合、最早杜鵑は陰鬱な凶兆の印しるし、或ひはセルフィッシュのシンボルとしては用ひられてはゐらず、夜鶯が悲しみを歌ふに反し此れは喜びの調べを歌ふものとされて居る。此の辺は詩人及び詩の歴史の興味深い変遷推移の跡とも云ふを得べきである。ミルトンは此のソネット以外にその試作中であつて、しばしば夜鶯を歌つた。イルベンセロソ一中にも、或ひはパラダイスロスト中にも、流麗の筆致を訪ねあてる事は容易である。譬へばパラダイスロスト第四卷六百二行に、

目覚めて居るものはただ夜鶯ばかり

彼女は夜中その愛の歌を歌ふ。

尚五卷三十八行にも、夜の夢を微睡んでゐるイブの耳もとにセイタンの言葉を以て此う囁かしてゐる。

今はや目覚めては恋の荷の妙なる歌の調へを寄する
あの夜を歌ふ鳥の音に破らるゝ以外、
楽しやかなる時刻は涼冷と沈黙しじまなるに
イブよ、汝なれはいかなれはとて眠るや。

第二章 ソネット二 (無題)

SONNET 2.

How soon hath time, the subtle thief of youth,
Stolen on his wing my three and twentieth year!
My *hasting* days fly on with full career,
But my late spring no bud or blossom sheweth.
Perhaps my semblance might deceive the truth,
That I to manhood *arrived* so near,
And inward ripeness doth much less appear,
That some more timely happy spirits indueth.
Yet be it less or more or soon or slow,
It shall be in strictest *measure* even
To that same lot however mean or high,
Toward which time leads me and the will of heaven.
All is, if I have the *grace* to use it so.

As ever in my great taskmaster's eye.

※3行目 career → career (卒論には career の f に訂正のマークあり)

※4行目 sheweth → shew'th

※6行目 manhood へ arrived の間に an が入っている

※8行目 indueth → endr'th

※10行目 be to in の間に still が入っている。

measure → measure (卒論には measure の n に訂正のマークあり)

※13行目 have と grace の間に the が入っていない

あの青春のさかしき盗賊なる時が、こはまた如何に早く
わが二十三の年齢としをその翼もて奪ひされることぞ。

過ぎゆく日はめまぐるしく走り飛べど

わが晩春おそはるはや蕾を開くによしなし、

われ殆ど一人ひとりだちの男となれりと云ふに

相応しき年配の魂を飾るてふ

中なる結実みのりおもてに名残より止め得ぬは

定めしわが容貌のまことを誤り伝ふるにやたがひなし、

それその表現、いかに小、大なるも、速すみかまた遅きと云ふも

卑賤いやしきと高貴たかきを問はず、われと天意を

時の導きゆくかの等しき宿世には

たがひなき量はかりにかけて変りなく同じ定めとはならん。

そをゆゑに若し用ふべき恵をもたば

永遠わが偉大なる創り主のまなぬちにあるがごとく総てこそあらん。

此のソネットは広く一般に紹介されたもので、千六百三十一年の十二月に作られたが、誕生日が同月九日である以上、当日に詠まれたと考へる事は妥当を欠いて居ない。『二十三の年齢としを迎へて』は此の詩のタイトルであるが、千六百四十五年及び千六百七十三年の詩集には現れて居ない。で此処には無題と書いた訳である。此の詩は或る友人に送つた書簡の末に書かれたものであつて、その書簡は前日その友と職業に就いて論議した折、たまたま英国教会の任命を受くべきか否かの実際問題となり、同友人より活社会に突入すべきを勧告されたのに対するミルトンの気品ある応答であつた。すでに序説に於て述べし如く此の時代はケンブリッジの学校生活を正に終へんとする際の将来に対する深い決意と熟考の時にして、人生、職業、及び自己の使命に対する悶と希望が相半ばし存在して居る事が解るのである。その手紙の主要部分に此う書いてある。『瞑想の限りない歓喜に非ずして至上命令の考察、即ち常人が為す如き早速の服従と云つた風の挙には出でづして、反対に神聖な尊敬または宗教的な忠告にまつて、如何によくそれを忍従すべきかを私は離れて遠くから考慮いたしたい。斯くて遅くなるなどの考を捨て去り、人生に対する更に適當なる便益を得んとするにほかならない。と申すは使用人の総てに賃金を支払はんと、あの葡萄園の主人が遣つて来る折には、最後に雇はれた者として同じやうにし何も失ふところが無いと信ずるからである。とは云へ貴下は私の中に自己に関する疑惑、或る行き暮れた徴候が潜んで居る事を御掠察下されをと思ふ。私は己が或る暗い思想、それは適當した理由で来たのであるが、曾てお話ししたペトラーク風のスタンザに作りあげて、甚だ厚顔の至りではあるがお贈り申す次第です。』此の次にソネットが書き記されてある。パチソンは此れを以て実生活に対する智的学的生活の気高い証拠であると見做して居るが、然しミルトンは己が立場を根本的にその土台の上には打ち立てずして、出世間の遅き所以を更に善く人生に適合させ得るやう作らんと、所謂ユー

テリテニアンの立場に立ちをれりと批評してゐるが、此れは余り文字に囚はれた厭ひがなからうか。ミルトンを偉大なる詩人として考へる余り、些少の一点にまで完全した天才の統一の閃を求めやうとするのは無理からぬ事ながら、我等はもつとリアルに観察しやうではないか。欠点は欠点とし、弱点は弱点とし、矛盾するところもその儘受け入れやうではないか。そうして其等を以て天才も矢張り我等と同じく地上を歩んだ人であると云ふ確信に燃え、その偉大なる事業に嘆美の眼を向けやうではないか。故に此処にあつてもミルトンを唯二十三才の青年として考へたい。余りその名によつて光輪を逸早く想像するは反つて偉大を害^そねる事になる。兎に角此の詩はミルトンが抱いて居た大なる生涯の事業、あの詩人たらんとする事に対する最初の自己告白であると云はれる。然もそれが動もすると移り易い青春時の怪疑と空想によつて取り巻かれて居たと云ひ得る事が出来る。斯くして此の事業に対する準備と云つてよいのか、真実なる創作気分^の来たるを待つて居たと云ふのか、彼が偉大なるエピックを書くに至るまでには、すでに此の詩以来三十年の年月を過^ごさねばならなかつたとは、徒^{いたづら}に書く事を以て能事至れりと心得た当時及びそれに次ぐ時代の模倣詩人輩にとつて、正に頂門の一針とすべきであつた。

用語法の上に於て第一行目にある“Stolen thief”及び第二行目の“Stolen……on his wing”等はポーフによつてその儘模倣されてある。五行目の“My semblance……”の句は後年デフェンシオセクンダの中にあつて、すでに四十才の折ですら十才許り若く常に見られたと自ら記しをるにも、又ケンブリッチ時代にザレディーオブクライスツと渾名されしに照らし見るも、如何に容貌が若々しく麗はしかつたかを語つて居る。その二十一才の姿はオニスローの肖像として名を伝えて居るが、現存して居ないさうである。唯これを版に刻してニュートンの千七百四十七年版のミルトンに出て居るが、それは極めて貧しく何等真の風貌を伝えては居ない。此のソネットに次ぐ第三より第七に至るソネットはイタリヤ語にて音楽伴奏を持てるものであるが、此処には研究の範囲外にあるゆゑ除外した訳である。

第三章 ソネット 八(無題)

SONNET 8.

Captain, or colonel, or knight in arms,

Whose chance of these defenceless doors may seize,

If deed of honour did thee ever please,

Guard them, and him within protect from harms,

He can require thee, for he knows the charms

That call fame on such gentle acts as these,

And he can spread thy name o'er lands and seas

Whatever clime the sun's bright circle warms,

Lift not thy spear against the Muse's bow;^r

The great Emethian conqueror bid spare

The house of Pindarus, when temple and tower

Went to the ground; and the repearted air^r

Of sad Electra's poet had the power

To save the Athenian walls from ruin bare.

※ソネット of → on

※ソネット Emethian → Emathian

※ソネット repearted → repeated

汝の好機をこの守りなき家々の上に捕はまほし

大尉、大佐、よろへる騎士よ、

若しも永遠武勲をよるこぶならば

守れ、彼をなそこなひそ、

かかる優しき行為に名声を与へ得る奇しき力をこそ

彼は知るゆゑに汝に報ひ

汝が名を海山うみやまはるけく輝く日輪の光輪が暖むる

いかならん国にまでも撒き散らすを得べし。

あげるなかれ、汝が槍を死神の隠家として、

寺院また塔の崩壊されるに際しても

かの偉大なるアレキサンドリヤの征服者は

ピニダラス家の救はれんことを命じぬ。

またかのエレクトラの悲しき詩人が繰り返せる歌の音は

アデンスの城壁を無惨の廢墟より救ふ力をこそ持ちゐたればなり。

此の詩はマッソンの意見に従ふと、タイトルを“On his dare when the city expected an assault”としてケンブリッジの遺稿中にあるが、それは筆者の手になつたものらしく、ミルトンはそのタイトルを、“When the assault was intended to the city.”と訂正した。然し千六百四十五年及び千六百七十三年の兩詩集には、此のソネットは無題となつて居る。マッソンによると前記の中、後者のタイトルはケンブリッジの原稿ではミルトン自身の手になつて居るとあるが、パチソンの意見を綜合して考へるところ、此のソネットの原稿は二種あるらしく思はれるのである。兎に角此の詩は千六百四十二年十一月に書かれたのは明亮な事実にして、ミルトンは年すでに三十四の壮年で

あつた。彼はアニテイ エピスコパルの激烈不撓なパンフレツティアーとし、又議会议員として衆目を集めた第二期の真中に乗り出さうとして居た。家庭的に見ればアルダースゲートに居を構へて二人の甥を教育して居たのも此の時分である。元来シビルウオアーは序説に述べし如く英国の歴史中であつて最も興味深い一時期を画して居るものにして、保守的な中庸を貴ぶ紳士風な英国の国民性から押し量ると、全く別の感を抱かざるを得ないほどの熱狂と急進思想が跳躍し、それを彩色るに清教徒の宗教的色彩を以てした時代であつた。今左にマツソンの文を再録してみやう。『最初の戦争的行為が終れる後、若干もなくして千六百四十二年の十月二十三日、エツジヒルの勝敗を決しかねた戦役のあとを受けて、王党の軍は中原からテムスの谷に添ふて、王及び皇太子に指揮され連二無二進軍し来たり、ホンスローやブレントホードの附近にまで至り、ロンドンを恐威した。然も更に突進してロンドン市民及び議會軍を一撃の下に粉碎せん勢まで示した。それは丁度十一月十二日の金曜日に手の届く時であつた。明くる十三日には襲撃が予期され、ロンドンの街中には甚大な興奮が伝はつた。街の通り通りはぶつちがひに鎖が引かれ、家々は堅く戸を閉すなど物々しい光景となつたが、然しそれは十三日の夜まで続かずして、王軍の退却により街の秩序を旧体に復す事を得た。』此の王軍の退却が斯くも急に行はれたのは、その糧道が意に任せなかつたのと、良将を得なかつたとに基因するらしい。斯くてロndonは救はれ王軍はコロンブルックの方へ退却し去つたのであるが、その明亮な絵画的叙述は当時戦の場にあつて親しく目撃したと云ふ、ホワイトロツクの書に残されて居る。此のソネットの中にミルトンはフィクション及び史的の伝説を挿し挟んで全体をクラシックな匂ひに包まうとして居る。さて此の詩が空想的な人物に捧げられたか、或ひはアルダースゲートの防備に當つた士官に与へられたものかは明亮でないが、我等が着目の主点は其処に非ずして、全体が現す思想と感情であらねばならない。我等は此の古典の雰囲気と音楽の中にあつて、当時の歴史的背景とそれを強烈に感じた詩人の心境と呼び起こさねばならない。かのロガースが此の詩を寫し取り、『カンパグナオブフロレンス』中にあつて、ミルトンを此う歌つてゐるのも相応しい思ひ出草である。

しかるときほどなく

ガレリオは己が迎へし客につき思へらく、

わが名を海山の彼方に撒きちらす

その人の手をば今かたく取りをれるなりと、

こは此のソネットの五六七行の模倣である。

十行目の Emetian はマセドニアンの意味にして、復樂園の三卷二百五十行にも同様の意味で用ひられてある。今此のソネットに使用された歴史的古事の説明を簡単に試みれば、紀元前三百三十三年にアレキサンダー大帝がセベスの街を攻略した時、伝説によると詩人ピインナーの家のみは災禍の難を許されたとある。すでにミルトンの時代にあってはトマス マジスターのピタ パンタリが流行の書として読まれて居たが、その書にあってはアレキサンダーの代りに、ラセデモニアンスが詩人の家を救ったとなつて居る。パチソンは此の書が確にミルトンの悩中であつて最初の詩題を作つたと云つて居る。十三行目の *The Gods* はユーリピデスが紀元前四百十五年から四百十三年に懸けて書いた悲劇で、その中に現れる娘デラホラはホーマー以外ミルトンの心に深い感銘を残したものの一つであるらしい。一千七百八十九年ジュッドレルの手にあつたポーラス ステハナスの版になるユーリピデスのテキストの欄外には、ミルトンの概博なギリシャ語の智識を偲ばせ得る書き入れの跡があるさうである。最後の詩句は次の如き伝説による。即ちラセデモニアンスが紀元前四百四年アゼンスに攻め入らうとした時に開いた評議の折柄、寄手の者の意見区々にして、或者は此の街を荒廢に化せしめ羊の牧場にしやうとさへ提言し、さては諸將が盃をあげて前祝ひとなすに至つた。その酒宴 酣なる時、一人のホーシス人が立ち上がつてかのエレクトラの合唱歌の完頭を歌ひ初めた。その詩句は次のやうに始まつてゐる。『お、アガメンの娘よ。われは来たれり……』此の詩の朗吟により一座の者は斯かる気高き詩人を出だせるアゼンスの街を滅ぼすには忍びずとして、軍を修め退いたと、ブルタークの物語が伝へて居る。こは歴史的根柢の薄いものであるにせよ麗はしい伝説である。然も此の事あつて以来、

十七年も立たぬうちに歴史はアレキサンダー大帝の武断的統一を教へ、詩の都、思想の国土として栄えたアゼンスの街も落ち入り、六千の市民は凶刃のもとに倒れ、三万の市民は奴隷に売られたと記してあるは、正に美と現実の痛むべき争闘の跡と見做し得る事が出来るであらう。兎に角歴史上の根拠如何は別問題として、巧妙に斯かる文学上の伝説、挿話を捕へ来たつて、己が環境の写実を的確ならしめる解明者とした点は、驚くべきミルトンの技巧である。

第四章 ソネット 九（淑女を歌へる）

SONNET 9.

To a lady.

Lady! that in the prime of earliest youth

Wisely hast shunned the broad way and the green,

And with those few art eminently seen,

That labour up the hill of heavenly truth,

The better part with Mary and with Ruth

Chosen thou hast, and they that overween,

And at thy growing virtues fret their spleen,

No anger find in thee but pity and ruth,

Thy care is fixed, and zealously attends

To fill thy odorous lamp with deeds of light,

And hope that reaps not shame; therefore be sure,

Thou, when the bridegroom with his feastful friends

Passes to bliss at the mid hour of night.

Hast gained thy entrance, virgin wise and pure.

※一行目 Ladyの「が」がな

淑女よ、いとはやき青春の真盛りに

賢しくもかの広き道、緑なす地を避けては

天なる真理の岡を

励みつ登り行く此等めだちて見ゆる数すくなき者等と

お身はマリヤ、ルツの善き分けまへを選べり。

かくてもや誇りややくしてお身が栄えゆく徳操に、

面白からぬ心の剣を磨ぐ輩とて

お身がうちには憐れみと情のほか

いかならん怒の影をもたづね得じ、

まことやお身が心労ひは至りつくしつ、匂ひ高き燈籠に

恥を来たらせ得ぬ光はた希望の業もて油みたさめやと心して待ちかまふ、

さこそあらめ花婿宴の友を伴ひては

真夜中よるこびに入らんとするとき

必ずやお身は入るを得ん、あ、賢しく清らげなる乙女。

此の詩は千六百四十四年、三十六才の作である。すでにライフの研究に於て述べた如く、此の前年の夏理由定か

ならずとは云へ（一説には父の借しつけた金銭を徴収せんとして）田舎に小旅行を試み、負債関係のあったリチャード・ポーエルの娘メリーを迎へ戻つて、アルダースゲートの家におき結婚の祭典をなしたのであった。が、その家庭生活は相和せずして、妻は夫の学究的生活を理解せず、徒らに鹿ついで読書振りや理性的な言動を掻き口説き、夫は又うら若い花嫁の希望や空想を度外視したのであった。故に結婚後若干もなくメリーは次のミカエルマスに立ち販ると約束して家を出たきり郷里へ逃げ戻り、以後千六百四十五年九月バビカンに於て彼の足下に平伏し寛容を乞ひ求むるに至る迄、長い間家を外にして居た。故に此の詩は妻の家出中に詠まれたものであつて、當時に於けるミルトンの一面を現せるものとし興味深いのである。兎に角これは女を歌つた三つのイングリッシュソネットの一つであるが、此の中に歌はれて居る女が何人であるかは歴史上の根拠を欠いて居る。然しフィリップの記すところによれば、妻に捨てられたミルトンが憧れて結婚しやうとまで考へた若きデービス婦人であるとか。即ち此の詩に称揚されてある婦人の美徳は、詩人が己が妻の中に求めて遂に得なかつたものであると。

此処に一言してをきたいのは本研究の方針として、なるべく本論にあつては専ら作品そのものの解明と背景の説明に努め、動主観的な批評や詩的価値の問題は結論に於て余白の許す場合、論及する事にしたのである。が今少しく批評を試むれば、此の詩の用語及び思想、感情は極めて有りふれた卑近なもの許りであるとは云へ、全体が持つ効果は可成り強いものである。此の点はバチソンも力説するところで『此のソネットはミルトンのソネットに關して一般が稱へて居る以上に或るものを例証し、詩のセオリーを暗黙の中に示して居る。』と書いて居る。即ち眞実な経験の暴露として価値があり尊さがあるのである。若し近代的テクニクを以て云ひ現せば、ミルトンの態度は印象的主観描写法である。特にそれがソネットに於て明瞭である。然しアリュジョンの多い点は飽古古典的色彩を免れ得ない。それに加へて余りに概博すぎた詩人の智力が現れすぎて居る厭ひがある。斯かる印象は我等が失樂園の大作を讀む時にも感じ得るところではなからうか。

さて此の詩全体は非常に聖書気分を濃厚に現したものであるが、マリヤ、ルツ及び、匂ひ高き灯籠等、中にも十二行の花婿の比喩の如きは有名な新約の寓話である。譬へば二行目の『広き道』の如きはマタイ傳七章十三節の

『狭き門より入れ。滅びに至る門は大きく、その道は広くそれより入るもの多し。』より、又十一行目の Hope that reads not shame はローマ書五章五節の『希望は恥を来たらせず、我等にたまひたる聖霊によりて神の愛我等の心に注げばなり。』より取ったものである。五行目と八行目が "ruth" で相韻してゐるのは、近代英国作韻法では最も忌み厭ふところで、特にソネットの如き厳格な形式中にあるのは尚更であるが、古代にあつては許されてをり、ドライデン、セークスピヤー、及びダンテすら『新生』に於て用ひて居る。二行目に戻つて "the green" の吟味に移るが、何故にミルトンが誤れる悪しき道をそう呼んだのかは解らない。イルペンセロソーの六十六行にも『乾ける柔かに刈り取られし緑の草地の上を歩むは樂し』とあり、又ラレグロー五十八行にあつても歌はれて居る。シェレーもそのソネット中に於て『人生の緑なす樂しき道を斯かる速やけき足もて踏みつけよ。』と書いて居る。六行目の "overween" はミルトンの好んで用ひた字句の一つで、トッドは失樂園の十卷八百七十八行及び復樂園の一卷百四十七行及び散文作品(千六百九十八年版)の一卷百四十一頁二卷百十五頁にも同じ用語がある事を指摘して居る。

第五章 ソネット 十(マーガレットレイ夫人へ)

SONNET 10.

To the lady Margaret Ley.

Daughter to that good Earl, once president

Of England's counsel, and her treasury,

Who lived in both unstained with gold or fee,

And left them both, more in himself content,

Till the sad breaking of that parliament

Broke him, as that dishonest victory

At Charonea fatal to liberty,^P

Killed with report that old man epouquent.^P

Though later born than to have known the days,

Wherein your father flourished, yet by you,

Madam, methinks I see him living yet;

So well your words his noble virtued praise,

That all both judge you to relate them true,

And to posses them, honourd Margaret.^P

※2行目 counsel → council

※7行目 Charonea → Charonea

※8行目 epouquent → eloquent

※14行目 posses → possess

honourd → honoured

曾ては英国参事会の議長また大蔵卿と、

黄金と捧給の穢れなくして官界に生き、

然もそれらを己が満足のうちに打ち捨て

悲しむべき議会解散後は

自由の致命傷たるかのケローニアの恥多き勝利が

年老へる雄辨の人を

その報知もて落命せしめしごと、

遂に命にまでかゝはるに至れる、善き伯爵の娘よ。

お身は父のときめきし日知らんにはよしなく

遅き生れなりとは云へ、お身により

夫人よ、われなほ亡き人の生けるを見るが如き心地す、

かくてもやお身が言葉はかの人の気高き徳をあがめ、

そをお身を品さだむる諸人が真実なりと語り

かつ所有するに至れる貴むべきマーガレットよ。

此の頭書きは千六百四十五年及び千六百七十三年の版には現れて居ない。作詞は千六百四十四年から五年に懸けた間、フリーリップによればソネット「九」と同じく妻の家出中であるらしい。ミルトンはその独身の淋しい生活にあつて、折節此のマーガレットレイを訪れる事を重なる慰めとして居たらしく、フリーリップもそれを力説し、時刻も夜だったと書き残して居る。マーガレットレイは賢しい才気煥発と云つた風の性質で、ミルトンは此のソネットの最末に歌つて居る如く非常に尊敬して居た。その夫たるキアプテン・ホブソンも又行きとどいた好紳士で、ミルトンとの交情をいたく喜んで居た。マーガレットの父は千五百五十二年に生れたゼームスレイと云ひ、ミルトンの歌へる如く千六百二十二年には大蔵卿に、二十八年には参事会議長に進み、又同年にはマールボアの伯爵となり、千六百二十九年に没した。時に七十七才であつた。一族の者はその死因を宮廷に採用された政策に対する失意と、一つには新議會の急激な解散の爲に早められたと信じて居る。此の辺の委しい消息は、クラレンドの歴史に現れて居る。

用語としては六行目に“dishonest”があるが、こは註釈を見るとラテン語の“inhonestus”の意味で辞書を引くと、“disgraceshame”と訳が与へられてある。だから私は『恥多き勝利』と訳してみた。七行目の“Charonea”は紀元

前三百三十八年マケドニアのフィリップの爲にアゼンストとテベスの連合軍が破られたと云ふ古戦場である。此れに続いた九行目の“Old man eloquent”はイソクラテスを指すものにして、九十九才の折ケローニアの敗戦の報がアゼンストに達したのち四日にして死んだと云ふ伝説を、此れも千六百二十九年三月十日の議会解散後四日にして死んだゼームス・レイと比較したのである。要するに此のソネットは第九と同じく妻に捨てられたミルトンの胸中に往來せる感情の反響と見る場合に非常な興味を感ずるので、特にその間離婚のパンフレットの第一がすでに出版されて居た事を思ひ合せる時尚更である。剛健で非常に理智的なミルトンの中にも異性に對する熱愛が奥深くに潜んで居て、それが己の妻によつて満足させられなかつた暁、此等のソネットに歌はれた二人の女性に注がれたのは、実に深い感銘を覚えずにはをれないところである。我等は此等の詩の男性的な率直で鹿ゆたかつゝい表現の中に、豊な人間味や愛情、涙と云つたものを訪ねあてやうではないか。

第六章 ソネット 十一（われ或る論文を書けるに侮蔑伴ひたればそれを歌ふ。）

ソネット 十二（同じ題目にて）

SONNET 11.

On the detraction which followed upon my writing certain treatises.

A book was writ of late called "Tetrachordon,"

And woven close, both matter, form, and style;

The subject new; it walked the town a while,

Numbering good intellects: now seldom pored on.

Cries the stall-reader, "Bless us! what a word on

A title-page is this!" and some in file

Stand spelling false, while one might walk to mile-

End green. Why is it harder, sirs, than Gordon,

Colkito, of Macdonnel, of Gallasp?

Those rugged names to our like mouths grow sleek,

That would have made quintilian stare and gasp.

Thy age like ours, o soul of Sir John Cheek,

Hated not Learning worse than toad or asp,

When thou taughtest Cambridge and king Edward Greek.

※一に四 Tetrachordon → Tetrachordon

※二に四 title → title

※三に四 of → or (一に五)

※四に四 taughtest → taught'st

SONNET 12.

On the same.

I did but prompt the afe to quit their clogs

By the known rules of ancient liberty,

When straight a barrous noise environs me

Of owls and cuckoos, asses, apes, and dogs:

As when those hinds that were transformed to frogs

Railed at Latona's twinborn progeny,

Which after held the sun and moon in fee.
But this is got by casting pearl to hogs:
That bawl for freedom in their senseless mood,
And still revolt when truth would set them free.
Licence they mean when they cry liberty:
For who loves that, must first be wise and good:
But from that mark how far they rove we see,
For all this waste of wealth, and loss of blood.

※1行目 afe → age

※3行目 barbrous → barbarous

先頃テトラコルドンと呼ばれし書物にかゝれしに
材料、形式、文体しつくりと織りなされ

その主題また新しくして優れたる智者を集めつ

しばしがほどは街に喧しかりしが、今や見るものもなし、

愚鈍なる読者は叫びて曰く、『あゝ、恵みを。これはまた何と云ふ言葉が表題の扉にあることぞ』と、

しかも或者は一哩なる草原を

歩み得んまに偽の文字を綴りつ、並びたちぬ。

そも諸君、何のゆゑを以て概書がゴルドン、コルキッター、マケドネル、

さてはガラスプよりも頑強なるや。

さあれ呆れし眼差、大口を開かんやもはかられざる此等の荒き名も、
我等が輩の口にかからんか。滑かなものところなれ。
お、サージョンチークの霊よ、我等の時代のごと汝が
ケンブリッチ、さては主、エドワードにギリシャ語を教へしかの時代も、
学問を慕、毒蛇より悪しきとて憎悪はせざりしものを。



われただ憶するところなく人も知る古き自由の法則もて
彼等が妨害物をうち捨てしめんとこそせるに、
たちまち梟、杜鵑、騾馬、猿、犬にいたるまで荒くれて喚きわれを取り巻く、
そは恰も蛙に変ぜられしかの農夫等が
後には日輪と月を領土にと受けつける
レトナの二子を嘲りし時のごとくなりき。
されどわが場合は愚かしき気紛れにて自由を怒号し
たとへ真理が彼等を自由ならしめし暁にも尚反抗する、
豚の群に真珠を投げ与へしことによりてまねかれたり、
彼等が自由を叫ぶ時、そは破格権を意味すなり、
まことやそを愛するものは先づ賢しく善ならざるべからざるに
されどいかばかりその善き印より遠く
彼等のへだたりあるや、

われそを総てこの富の浪費、人血の消尽のゆゑもて見るなり。

ソネット十一、十二は同じ題目を歌へるものなる故に、此等には両者を纏めて研究する事とした。此等の詩はミルトンの第二の詩集たる千六百七十三年版に初めて現れて居るところからして、千六百四十五版の印刷後に作詞されたものと見て差し支へなく、両者ともパチソンによると千六百四十五年から六年へ懸けての作品であるらしい。『或る論文』とは千六百四十三年に“The doctrine and discipline of divorce restored to the good of both sexes”と云ふ表題のパンフレットを公にしたが、ピュリタンやプレスビテリアンの社会より非常なる攻撃を受け、書中の離婚に対する自由思想は一般の物議を醸すに至つたのであるが、ミルトンは其等の轟々たる世論的となりながら辟易するどころか、反つて勇敢にもその中に突入し、最初のパンフレットの論旨を反復し、更に強く三種の論文を公表するに至つたそれを意味するのである。今其等の題目をあぐれば、

(1) The judgment of martin bucer concerning divorce.

(2) Tetrachordon: expositions upon the four chief places of scripture which treat of marriage.

(3) Colasterion.

で、最後の二ツは纏めて一とし、千六百四十五年の三月の四日に出版されて居る。マツソンの説によると、此の風変りなる離婚の教義は社会の驚愕を惹起し、各刊行物を通して攻撃され、治安法に触れんとする危険もあつた程である。マツソンは更に語を継いで此の二つのソネットは妻メリーがすでに家出の詔をなし許されて和解が成立した後、即ち実際上から見ても離婚云々の必要なく、個人的興味から見ても作意の熱情が冷却せんとしつゝ、あつた折だと記して居るが、此の点は伝記記者中にあつても異論ある模様である。此処には煩鎖を避けて唯如何にミルトンの詩が実生活と有機的關係にあつたかを銘記するに止めたい。

ソネット十一の一行目にあるテトラコルドンはギリシヤ語で The four-stringed の意味を持ち、それをミルトン

は聖書よりの四ヶ所の引用句にもちって用ひたものである。八行目のゴールドン、コルキットー、マケドネル、又はガラスプなど此等の個有名詞はモントロースの配下にあつて、千六百四十四年から五年の戦役に指揮者だった連中である。マッソンによると、ゴールドン又はゲオルゲーはハントリー侯爵の長子で、他の三つの名は同じ人物即ち若きアレキサンダーマクドーナルド、俗に云ふ若きコルキットーの事である。

ソネット十二の四行目には梟、杜鵑、驢馬、猿、犬などの動物名が並べられて我等の注意を引くが、パチソンの説によると此れはイスパニアに居たロープドベীগと云ふ詩人が、幼年時代に犬や猿やその他怪物に取り巻かれた人を現した絵を描いたさうで、その絵をミルトンが見たか又は人伝ひとつてに聞いたらしい節が多いとは単なる想像ではない。五行目の“transformed to frogs.”の伝説はオビッドによつて歌はれたギリシヤ神話の一つであるが、今それを疎述してみやう。レトナーはレトトーとも云ひ、コーエラスとフォエーバーの間に生れた闇の女神で、その眉目麗はしき為、ジュピターに愛されアポロとダイアナの二神を産むに至つた(アポロは太陽の男神、ダイアナは月の女神として詩に用ひられて居る)。然るに、嫉妬深いジュノーはレトナーを地上に追放し、剩へ命じて若し地に住む生物の中にて、レトナーに憐み又は救ひを寄するものあれば嚴刑に処する旨を云ひ渡した。斯くして疲れ果てた哀れなレトナーは饑渴に苦しみつ、池に近づき水を飲まんとしたが、居合せたりシアの農夫達はジュノーの報仇を恐れてレトナーを立ち去らしめんと一工夫を案じ、池に飛び込み水を掻き廻し飲めぬやうに濁して仕舞つた。苦しみ極まってレトナーは大声に祈り農夫達を呪つた。此れを見たジュピターは憐愍の情に堪へかね、たちどころに農夫達を大きな青蛙に変ぜしめた。此れをミルトンが用ひたのである。九行目の説明にパチソンは doctrine and discipline (プローズワークの二巻六頁) 中の句を引用して此れと対象させ、又復樂園の三巻四十九行にも同様の思想が現されて居ると云ふが、此処にては此れ以外の説明は省くつもりである。十二行目の“Who loves that must first be wise and good.”はテナーオプキングス(プローズワークの二巻四百五十頁)の中に同意義の文句が見出される。『何人も身自ら善き人にならずしていかでか心より自由を愛し得べき。此れ以外のものは自由を愛せずして暴君のもとに於ける天地と放逸より以上のものは決して持つ事なき破格権を愛する

に過ぎず。』要するに此の二つのソネットの如きも、一見しかくして、スペンサー、セークスピヤー及び十九世紀の浪漫派詩人達の流麗にして温雅なる詩調に比ぶる時、動もすると詩的価値を云々したがるジョンソン一派の批評家もある模様であるが、精細に分析吟味して読めば深い感情の表現を味ひ得べく、恋歌としてのソネットを各範囲に用ひやうとしたミルトンの努力を大いに見留めねばならないと思ふ。故に叙情纏綿として尽きずと云った風の女性美に対し、此れは男性美の現れと云ひ得られるやうな気がする。

第七章 ソネット十三（長期議会のもとに於ける良心の強制者を歌へる。）

SONNET 13

On the new forcers of conscience, under the Long Parliament.

Because you have thrown off your pralate lord,

And with stiff yows renounced his liturgy,

To seize the widowed whore plurality

From them whose sin ye envied, not abhorred;

Dare ye for this adjure the civil sword

To force our consciences that can set free,

And ride us with a classic hierarchy

Taught ye by mere A.S. and Rutherford?

Men, whose life, learning, faith, and pure intent,

Would have been held in high esteem with Paul,

Must now be named and printed heretics

By shallow Edwares and Scotch what d'ye call⁴⁾

But do we hope to find out all your tricks,

Your plots and packing, worse than those of Trent;

That so the parliament

May, with their wholesome and preventive shears,

Clip your phylacteries, though balk your ears,

And succour our just fears,

When they shall red this clearly in your charge,

New presbyter is but old priest writ large.

※1行目 pralate → prelate

※9行目 can じやん Christ じやん

※10行目 Paul → Paul

※12行目 Edwares → Edwards call ち call じやん

※16行目 wholesome → wholesome

※17行目 balk → baulk

憎悪せざるのみか、反つてその罪を羨む者等より

寡婦なる多くの淫奔^{やもめ}女^{いんぽんをんな}を捕へんと。

汝^なが大僧正を投げ捨て

頑固なる誓もてそが祈祷書をもうち捨てしがゆゑに

汝等はあへてそがため自由ならしめ得べき我等が良心を

匡正する内乱の劔をとがめ

以て単なるエイ、エスやルーサーフォードによりて教へられし、

陳腐極まる教政もて我等を統御せんとやするか。

その生活、学識、信仰、その純潔なる熱意の高き価値をポウロと並び保たれしならん人々が

浅薄なるエドワード輩や、汝等が呼ぶスコットランドの輩によりて、

今や名付けられ印刷されて、異端者よばはりされざるべからずとは、

されど我等は死者の三十日祭よりも悪しき

汝等が策略、計画、防備ぶりを見破らいではをくべき、

さこそ議会が

その健全にして防備よろしき鍊もて

耳を避けるとも汝が般若経をちぎり取り

我等がまことなる恐怖を和げんことを願ふ。

汝が叱責のうちにこを明亮に彼等読むとき

新しき長老とは、ただ古き祭司のギリシヤ風に

誇大化されしにすぎざるなり。

此のソネットは千六百四十六年、三十八才の作である。マッソンは前記の詩と同日に書かれたと見て差し支へなく、若し然らずは四十七年ならんと云つて居る。元来此のソネットは問題の作品にして批評家の意見も多い模様であるが、マッソンは此れを一つの独立せるソネットと見做さず、その詩集中に番号も付けずソネット十二の次に附属させて居る。又、トッドの如きはその千八百九年編纂の詩集中に此れをソネットの部類より除外さへして居る。

斯くの如くにして詩形上より見て奇怪なる奇形児であるかの如き論難も少くないのである。然るにパチソンは研究の結果、新しい見解を立て、大いに弁護して居るがそれは非常に注目を引く。その意見に従ふと此のソネットこそ(他の二十三は勿論だが)ミルトンが如何にイタリヤのモデルを嚴重に守つたかの確証になると云ふのである。所謂コラ コダ(Colla Coda)と呼ばれる詩形である。此の形式は十五世紀代に紹介されたもので、始めバルチェローの名で伝はつて居る、かのフロレンスの鋭い風刺作家によつて愛用されたが、後十六世紀に至り、あまほ遍く流行を見、それが又十七世紀の初頭にフロレンスにて再生したもので、ミルトンが外遊の途次、その風刺体の詩形が歌はれつゝあるのを親しく見聞する機会を得たのである。此のコラコダなるソネットの形式をプロソディーの上から簡単に解せば、ソネットの体の如く厳密な法則を持つて居るのである。コラコダとは尾のあるソネットの意で、コダ(尾)は一若しくはそれ以上のタアセット(ソネットのセステットを構成する三行一組)からなりたち、各タアセットの最初の一行はソネット本体の行より短縮されたものであらねばならない。従つてソネットがデカシラブルならば、タアセット最初の行は六シラブルである事及び、その最初の行はソネット本体十四行目と相韻する事、然してタアセットの残れる二行はソネット中に用ひられざる別の相韻をなす事、以上は重なる法則である。斯くしてタアセットの数を増す事により、ソネットは適宜に増大し得るのである。今ミルトンの用ひたコラコダを見るに以上の法則は綿密に守られてある。即ち二のタアセットが添附されて居る。

さて内容から此のソネットを研究してみると、当時ミルトンが抱いて居た思想の傾向を窺う事が出来る。此処にマッソンの意見を抜粹すれば次の如くである。『一部は離婚のパンフレットに対し、プレスビテリアン等の社会からあげられた喧轟の声に向つての自己の不屈な弁護から、他の一面にあつては更に全体的な思想の相違から必然的に彼等と袂を分たざるを得なかつた状態にあつた。で当時クロムエルの主張と見做されたるインデペンデントの団体に、若しくは其等団体の思想主義に於て結合一致せんとした。その眼目とするところは長期議會により、スコットランド流に、エビスコーパシーの廃棄と共にプレスビテリアンの教会政治や教会教育のシステムを設置し、すでに一部分効を修めつゝある事に対する根本的な反対にあつた。』約言すれば飽迄真実であらうとするミルトンの

論理的傾向が、ローレーの言葉を借ればプラトリーのレパブリックから演繹して、殊にその政治的及び法律的自由の主張に於て、ギリシャの都市国家を理想とせる（ローレーのミルトン研究より）彼の心的傾向としては、プレスビテリアンよりインデペンデントに移り行つたのは当然の結果と云はねばならない。確にミルトンの思想、殊に歴史観にはダンテのそれにあつた如く、偉大なコスミックの自由愛（譬へそれはカント以後の近代的なものでないとしても）の含まれて居た事が測知され得る。動枝葉に互るがかの時代の一般思想の説明として一例をあぐれば、ラテン及びギリシャ語を学校にて教へる事の不可なる議論が起り、その理由としては斯かる言語は帝王政治を破壊する自由思想を伴ふ故だとあつた。此の点に關してローレーは島国根性的思想、即ち後年アーノールドがプロビンシヤリズムと云つて厭悪した排他鎖国主義に対し、とてもミルトンの広い新しい自由思想は我慢がならなかつたと云ふ風に書いて居る。以て如何に時代の混迷なる重荷をミルトンがその足に引きずつて居たかは察するに余りがある。序説に於て予め述べておいた如く、斯くてこそミルトンの二十年に互る散文時代も無意義ならざる多くの理由と活発なる例証とを我等に指し示して居る訳である、斯くして我々はソネット十一、十二、十三と順を重ねて特に論理的だつた詩人の性格の跡を偲び、パンフレットの論争と縁故深き詩的作品を瞥見し得た訳で、我等は此等の詩句の中に、その調子に、ミルトンの怒号の響を補へ得るやうな気がするではないか。ベーコンの理想を抽象としてではなく、現実の問題として教会、宗教、教育、社会の上に迄適用しやうとして、教会ビュリタンからプレスビテリアンに、或ひは又ロイヤリストとして、それからインデペンデントに、次にはクロムエリアンとして、遂にオリベリアンに至るまで變つて行つた。外見無節操の如く見ゆる思想、主義の推移を静かに眺むる時、ミルトンの内的苦悩に対し我等は襟を正しうせざるを得ないのである。飽く事なき真実、自由の探求に対する情熱とを本質に於て見落す時、総ての批評は徒勞のすぎざる事を忘れてはならない。此れに就いて思ひ出すはニイチエの言葉である。『もし誰かがお前はその主義主張を持つて居るからと云つて、私を十字架につけやうとするなら、私は逃げるかも知れない。然し若し私があゝの主義から此の主義へ變つたからと云つて十字架につけたがるなら、私は喜んでかゝらう。』此れはなんと含蓄の多い言葉であらう。今私はローレーがその親切な研究に於て分類して居たミルトンの自由思想

を、重に散文作品の中から摘出してみやう。

一、宗教的自由、

一、自由離婚、

二、家庭的自由

二、出版の自由、

三、教育の自由、(特に児童の百科辞典的つめこみ主義に対し)

三、内治的自由、

斯くてこそウエストミンスターの僧団を中心とする厳格なるプレスビテリアニズムには最早真の自由なき事を発見し、それに対する反抗を始めた最初の烽火こそ此のソネットである事を知る時、無量の興味を覚えるのである。

今、用語上の説明すれば第一行の *prelate lord* の廃棄は歴史上の事実として一六四六年十月九日のエキスコパシー(僧正統治)の法律的廃棄を意味し、第二行目にリタジー(祈祷書)の廃棄は千六百四十五年一月三日と記録されてある。八行目の *his* はアダムスチューワートを指し、此の人はパンフレットテイアーとして有名で、オーソドックスなプレスビテリアニズムの立場から新しい教派、信仰を攻撃した。同じ行のサムエルルーサフォードはセントアンドアルース大学の神学教授で、後ウエストミンスターアッセンブリーの一員となった人である。十二行目の *shallow* なる形容詞がエドワードに加へられてあるが、此の形容詞は七行目の *classic* と共に、勿論侮蔑的風刺の意味に用ひられたもので、特に此の *shallow* はミルトンが好んで用ひたエピソードで、すでにソネット第一にもあった。エドワードは千六百四十六年代にパンフレットを盛に出版したものでそれに習ふものも甚だ多かった。ミルトンはこの連中によって異端者の部類に数へられたのである。更に同行の *scotch what dye-call* は四人のスコットランド生れの神父達を意味し、ウエストミンスターアッセンブリーに座ったのは前にあげたサムエルルーサーフォードとアレクサンダーヘンダーソン、ゲオルゲギルレスピーとロバートベリーであつて、ミルトンの矢さきに懸かつたのは多分ベリーだと云ふ説が多い。マッソンもパチソンもそれに一致して居る。と云ふのはミルトンが離婚の論文によりこの宗教家より手強き攻撃を受けたのが、有力な根拠と見做されて居たからである。

第八章 ソネット十四 (エッチローエス君に寄せてその歌曲を歌ふ。)

SONNET 14.

To Mr. H. Lawes, on his airs.

Harry, whose tuneful and well-measured song

First taught our English music aow^p to span

Words with just note and accent, not to scan

With Midas'ears, committing short and long,

Thy worth and skill exempts^p from the throng,

With praise enough for envy to look wan:

To after age thou shalt be writ the man,

That with smooth air couldst humour vest our tongue.

Thou honour'st verse and verse must send her wing

To honour thee, the priest of Phoëvus' quire,^p

That tune'st their happiest lines in hymn or story.

Dante shall give fame leave to set thee higher

Than his Casalla, who he wooed to sing,^p

Met in the milder shades of Purgatory.^p

※ニニ田 aow → how

※らニ田 exempts へ from の間へ thee へ入へる

※ラニ田 Phoëvus → Phoëvus

※ラニ田 Casalla → Casella who → whom

※14行目 Purgatory → Purgatory

ハーリー、お身の調和あり按排に適へる歌曲は

わがイギリスの音楽にマイザスの耳をもて聞きただすには非ずし、
正しき調べと抑揚により長短の韻を伴ひては

我等が言葉を如何に量るべきやと教へし最初のものよ、

お身が価値、お身が妙技は、お身を衆群より

誹謗者をして色なからしむほどの称讃もて抜きんぜしめ、

後世なめらけき歌にて優れし我等が言葉の面白さを現せる

その人よと書き記されんは必定なり、

お身は詩をあがめ詩の女神もまたその翼を送るべきなり。

お身こそ、幸ふかき歌を、讚美歌にはた物語にとかなづる

かのアポロの神に集ふ合唱団の牧者。

ダンテもまた焦熱地獄の和なごやけき樹蔭にて巡り逢ひ、

歌もがたと愛恋せしカーセラにも優りて高く

お身に名声を与へんとこそおほゆれ。

此のソネットも十三と同じく千六百四十六年の作だとはパチソンも記すところであるが、ケンブリッジの遺稿には "To my friend Mr. H. Lawes, on the publishing of his aires," とある。マッソンは千六百四十五年を主張して居るが、パチソンといづれが正しいかは私には解らない。ローエスはその当時非常に愛好された作曲家にして年とは八

才年長であったが、幼年期よりミルトンとは親しい友情関係を結んで居た。かの仮面劇コマスをルードロー城にて上場の際、歌曲を付け親しく舞台監督をしたのも、後千六百三十七年それを印刷にして刊行したのもその人であった。此のローエスにはその他当時の名ある詩人、譬へばカリユール、ヘリック、ウオラー、カートライト等の詩の作曲数篇もある。ミルトンは一千六百四十五年の版に此うローエスに呼び懸けて居る。『キングスチャペルの紳士にして、陛下の親しき楽手の一人なる云々。』ところが此のローエスは王党のキャバリアーで、千四百四十八年に自ら出版した選讀美歌集の如きは、当時幽囚の身である王に捧本されて居るに照らしみても解るほど、ミルトンとは社会関係上全然反対の立場にあつたのである。此うした二人の友情を考へる時、我等はまことに麗はしいエピソードを指し示される次第で、如何に政治的環境や思想的立場が異ればとて、竹馬の思ひ出と音楽に対する共通な情熱が、一言に云へば、如何に芸術が総てを超越させて居るかを教へて居るではないか。此処に言葉を新にするまでもなく、ミルトンが音楽を愛しオルガンやピアノを巧妙たくみに弹奏し得た事は何人も知つて居るところである。

第四行目のマイダスはギリシャ神話から取つたもので、その話は此うである。曾てアポロの神とマーシアスの神（後パンの神）とが音楽の競技を争つた折、マイダスが二者のうち一人が勝つ事を横合より提言し、その結果二神より呪はれ耳が驢馬の耳に変じた。其処でマイダスはそれを頭巾すきんで覆ひ隠して居たが、はしなく此の秘密は散髪師の為に発見された。散髪師は秘密を包みかねて地に穴を開けその中へ『マイダスの耳は驢馬の耳』と獨語し穴を埋めた。然るに其処より一本の木が生じてその秘密が後の世までも伝はるに至つた。此のマイダスの耳に關しトッドはナツシユのピエルセペンニレスに次のやうな句のある事をあげて居る。

添作もされずして返り見られざるわが詩文のかこつを

マイザスの耳はその嘆きをばうち沈めんともせず。

同行の committing は、パチソンの注解によるとラテン語の committere の意にして "to match, to pair, to bring

together.”と訳されてあるところから、私は単に『ともなひて』と訳した。十三行目の“his Casella”とあるは、ダンテが地獄篇二卷九十一に、“Casella mia.”と呼び懸けて居るところから取って来たのである。カーセラはその妙技を歌はれしフロレンスの音楽家にして、ランデイノの音楽史にはダンテとカーセラの交りが書かれてある。曰く『勉強に倦み疲れた魂を再生せしめんとして、ダンテはよくカーセラの仲間となった。』

第九章 ソネット十五 (千六百四十六年十二月十六日に身罷れるわがクリスチャンの友、カセリント

ムソン夫人の宗教的思ひ出を歌へる。)

SONNET 15.

On the religious memory of Mrs. Catherine

Thomson, my Christian friend, deceased 16 Dec. 1646

When faith and love, which parted from theenevere,

Had ripened thy just soul to ewell with God,

Meekly thy didst resign this earthly load

Of death, called life, which us from life doth sever.

Thy works and alms, and all thy good endeavour,

Stayed not behind, nor in the grave were trod;

But, as faith pointed with her golden rod,

Followed thee up to joy and bliss for ever.

Love led them on; and faith, who knew them best

Thy handmaids, clad them o'er with purple beams

And azure wings, that up they flew so drest,

And speak the truth of thee on glorious themes

Before the Judge; who thenceforth bid thee rest,

And drink thy fill of pure immortal streams.

※ 一行目 theenewere → thee never

※ 二行目 ewell → dwell

曾てお身より去りし事なき信仰と愛が

神と共に住む為にや、お身が正しき御霊を突らせし折しも、

世の命てふ真実は命より我等を引きはなつ

地上なる死の重荷をしとやけくも打ち捨てしことよ。

お身が勲、捧げもの、はたすべての善き奉仕は、

お身が後方にとどまらず、また墓場にて踏みにぢられざるのみか、

信仰がその黄金の杖もて指し示すまゝに、

お身に従ひては永遠歎喜と万福を指して昇りゆかん。

愛はそれを導き信仰はまたお身が侍女なる其等のものを会得し、

紫の光り緑こき翼もて飾り、

かくてもや彼等は装ひて高く飛びあがり

裁判の場にて栄光の話題につき、お身が真実をぞ述べ伝へん、

しかる時大神はお身に憩ひて穢れなき不死の流を心の

かぎり掬せんことをぞ命じ給ふ。

此れも前者と同時代の作品である。その頭書きは千六百七十三年版には現れて居ないので、ケンブリッジの遺稿中より取ったものであるとパチソンは云つて居る。主人公のカセリントムソンが何人であるかに就いての探索は記録が残つて居ない為、全く解らないが、マッソンは詩人の甥フィリップの書き残せる手蔓から此れ丈の事を判断して居る。即ち一千六百四十九年頃にスプリングガーデンに打ち開けて居るヴーバルヘッドタバーンの隣なるチャーリングクロスと云ふ某トムソンの家に住んで居た事あり。カセリントムソンは此のチャーリングクロス家族の一員に非ずやと云ふのである。然し此れは想像にすぎない。此れをソネット三、五、及び十、と比較する時に、ミルトンの婦人に対する考へ方、広く云へば美の思想の変化を知るに便利である。上述のものは総て婦人を主題として歌つたもので、皆ベトラーク風のロマネスクな婦人観が多く現れて居る。十五に於ては魂の美に専らストレスが置かれて、教育の程度とか外貌の優雅などと云つた問題が精神的なものと置き代へられて居る。さらばと云つて此の事実が詩人の美的官能や感受性の減退せるものと見做すのは早率である。然し兎に角ロマンティックなキアバリアー的の要素が、ピュリタニズムの影響を受けて道徳上の判断に傾いて行つた事は確な事実である。此の点に關しテーンの説を疎述せば此うである。即ちミルトンの作品には二つの英国氣質が現れて居る。(此う云ふところがフランス風な批評振りかも知れんが、強ち英国氣質と云ふには及ぶまい。)一は美に対する熱情で飽迄純粹な創造的幻想や官能を裸体の儘に、自然の儘に求めやうとする。それらを除いては如何なる法則も宗教も無いと云ふ自然信仰を有し、しばしば不道徳な要素を交へるほど飽迄パーガンたらんとする傾向にして、ベンジョンソン、ビュモンド、ペレッツチャー、セークスピア、スペンサー等によつて表示されて居る。第二は実験的宗教によつて堅く守られた現実主義、即ち感じ得るもの、有要なるものと云つた家族道徳を賞讃する嚴肅な倫理生活の主張である。要するにミルトンのうちにはラレグローとイルペンセロソーの二方面、即ちヘレニズムとヘブライズムがあつたと云ふ事に版着する。ローレーも云つて居る。ミルトンはあの豊麗なコマスを最後として堅い莊嚴な詩の世界へ這

入って行つた。我等はそのクライマックスを失樂園に於て見るが、其処には矢張りコマスの響が潜んで居る事も否めないと。兎に角思想が非常に論理的となつて行つた一方、情操もその変化を受けて靈化され抽象化された事は確であるが、前にも云つた如く此れを以て人間味の多い美的鑑賞が消尽したと見るは誤りにして、矢張りパチソンの云つたごとくアトラクションに対する官能性が姿を変じたと見るのが至当のやうに思はれる。

二行目の *ripaped* はミルトンが好んだ用語の一つで、肉体上の發育發達を示すメタファーとしてはコマスの五十九行、徳の円満な象徴としては復樂園の三卷三十一及び、すでに研究したソネット二の七行目に現れて居る。七行目の *golden rod* はオデッセの十六卷百七十二行に信仰は門番として人格化され、その役目は靈を金の杖に導き案内すると云ふところから取つたものである。此れはラテンの詩人や、スペインサアのタイタネスミュージタービリティーに模倣され、又キャンベルの『希望の喜び』第一巻に、又ワーズワースによつては『聖者に寄す』の中に白銀の杖となつて歌はれて居る。此等は皆パチソンの研究である。十二行目の *sake* となつて居るのも少くない模様であるが、マッソンはその誤りなることを云つて居る。十四行目は讚美歌三十六、八行目の『汝は汝の喜び川より彼等に飲ましめん。』から取つたものである。